令和５年度　図画工作科実践・研究計画

部　員	○小室　真紀、三浦　茉子

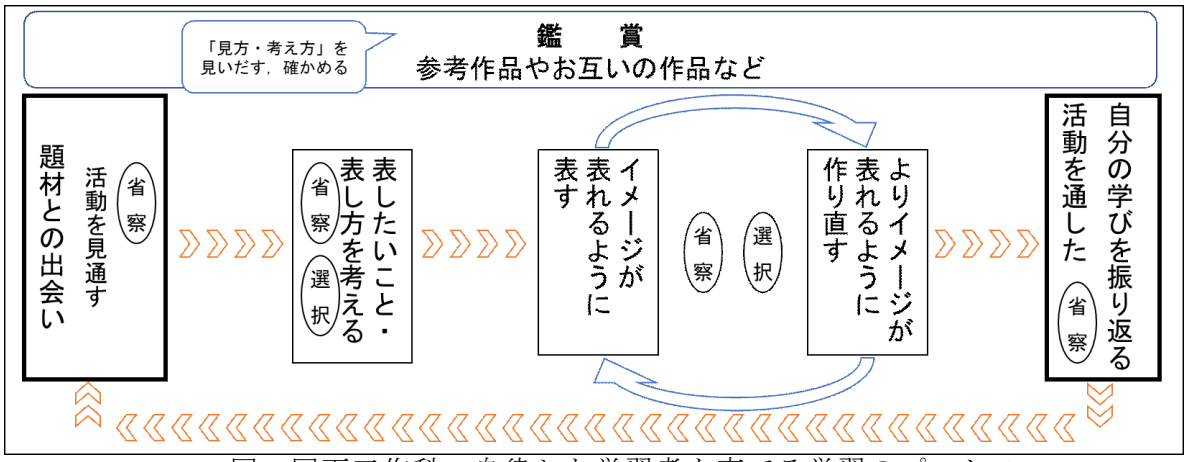
研究テーマ
表したいことをはっきりともち、学びのものさしを活用しながら表現を工夫していく子どもを育む学び

1　研究テーマについて

図画工作科の特質は、自分が表したいイメージを形や色で表すことである。「できた」と話す子どもの中には「どうしてその色を選んだの？」「これらの形を組み合わせた意図は？」と問いかけられたことに対して言葉をつぐんでしまう子ども、もうこれで十分という子どもも見られることから表したいことと表現とのつながりを根気強く深めていくという点で課題が残った。形や色に着目した「見方・考え方」そのものが「学びのものさし」ともなる。表したいものと向き合って試行錯誤していくときの支えになっていくのが省察であり、省察の場は学びのすべての場面に成される。仲間と共に学ぶ中で「この色でよいのか」「表したいことが作品から伝わってくるのか」自分自身に問いかけ続ける省察が表現をより色濃くしていくのだと考える。

そして、鑑賞の在り方が大きくかかわってくる。表現と鑑賞は互いに働きかけたり、働きかけられたりしながら、補い合って高まっていく活動である。自分たちの作品や親しみのある美術作品などを見合い、自分の見方や感じ方を深めていくことで、表したいことを見付ける力が高まっていったり、表現の幅が広がっていったりするものと考える。よって、表現と鑑賞を連動させ、自分が表したいことをはっきりともつことを大切にし自分の「学びのものさし」を更新して作品づくりに取り組む子どもの姿を目指し、実践を積み重ねていく。

図画工作科で目指す自律した子どもの姿
- 表したいイメージに近付くように表し方を工夫したり、造形的な活動を工夫したりしながら、「学びのものさし」を更新していく姿。
- 作品づくりや鑑賞を通して作品などに対する見方や感じ方を広げ深め、自分の学びを自覚し、今後に生かそうとする姿。



図：図画工作科　自律した学習者を育てる学習のプロセス

2　研究の重点〈○は具体的な取組の例〉

イメージや形、色などに着目した「見方・考え方」を働かせながら、表現や活動を工夫していく子どもを支えるための手立て

○お互いの作品や活動を鑑賞したり、対話したりしながら、「学びのものさし」を確かめ、更新していくことができるような省察の在り方の工夫。
○子どもとの対話を通して、子ども一人一人の表したいことを見取り、表したいことが効果的に表現できるような気付きにつながる学習活動の工夫。